

優秀賞

言葉

茨城県 茨城町立明光中学校二年 清水 美幸

「うるさいよ。」

私は今朝、祖母に向かってこうさげんでしまった。今日は、お盆が終わり、久しぶりに部活動のある日。しかし、私は朝から寝坊をしてしまった。寝坊した朝に遅刻をしないためには、たったの一分だって三十秒だって大切にしなければならぬ。その大切な時間の中で私は、夏休み中必ずやることにした、お風呂掃除をしていた。

その時、起きてきた祖母に、
「今日は、学校に行くの。」

と聞かれた。けれど私は、寝坊して時間がないため、機嫌が悪く、

「うるさいよ。」

という言葉が、自然と口から出てしまった。

その時の私の心は、「あたり前のことを聞かないでよ。このジャージ姿を見れば分かるじゃん。」そうつぶやいていた。けれど、祖母の顔はとても悲しそうに見えた。

私は、お風呂掃除が終わったら、急いで、祖母に「行ってきます」とも言わずに家を出てしまった。けれど部活動中、私は自分の言ってしまった「うるさいよ」という言葉について考えていた。

朝、祖母が私に話しかけてきた言葉には「頑張ってきてね」という意味もあったのだろう。しかし私は、「うるさいよ」というとてもつめたい言葉を返してしまった。その時に「今日は部活動があるんだ。頑張ってくるね。」などという明るい言葉を返していても、お風呂掃除をしている手が止まるわけではないし、時間が二倍のスピードで過ぎてしまうわけでもない。

私は、つめたい言葉を返してしまったことに後悔し、自分が嫌になった。そして祖母に、何とさえば許してもらえるかを考えながら帰宅した。す

ると、優しい祖母の声が聞こえた。

「おかえり。暑くて大変だったでしょ。」

私は、この優しい言葉に安心した。そして、

「朝は、ごめんね。」

と素直にあやまり、許してもらった。

私は、「うるさいよ」という自分の言ってしまった言葉と、祖母の言ってくれた優しい言葉を考えることによって、言葉の素晴らしさを知った。

たった一言で、人を明るくしたり、悲しませたり、安心させたり、不安にさせたりすることが出来る。私は、これからもこの便利な言葉を使って生きていくが、人を悲しませたり、傷つけたりするような言葉は使わないように心がけようと思った。

言葉は、人間にとって、とても大切な宝物である。でも、時には人の心を傷つける、目には見えない武器にもなる。私達は、言葉を武器としてではなく、傷付いた心を優しく包むために使わなければいけないなあと思った。

